

ベルクソンにおける自由と行為の問題

——自我の二つの解釈を巡って——

小関彩子

初めに

我々が自らの行為を決定するものを明らかにせんとする時、通常「何が我々をして行為を為さしめるのか」という方向に解決の方法を探る。しかしながら、この問は「そのような行為を為した、その我々とはいかなる者であるのか」という問を導き出さずには擱かない。この問題に対するに本論文は、自我論との関係において展開されるベルクソンの行為論の検証を以てする。その第一の主著の表題が示すごとく、我々の「意識」に直接「与えられた」事象そのものへと、その事象に即して迫ろうとした彼の方法的態度は、後続するフランス哲学界に現象学への道を開いた。ベルク

ソンにおいては行為する我々に与えられているのは、行為という体験であり、行為する我々自身なのである。

このベルクソンの行為論は、従来様々な批判・解釈・議論を喚起して来た。ベルクソンにおける自由が意志的行為のみに存すると解釈したサルトルは、自由は私の実存そのものに等しいと批判した。^① 反対にメルロ＝ポンティは、ベルクソンに精神の自由に安住して行為の自由を求めない現狀容認の思想を見て取り、精神と身体の乖離が自我の解明も行為の自由をも妨げていると批判した。^② 両者とは対照的にドゥルーズは、ベルクソンの持続概念を差異として再構成することで、その乖離の超克が可能であると発展的に解釈している。^③ ベルクソンの行為論がこのように多様な評価を許してしまう背景には、彼の議論が孕む何らかの矛盾が

存在しているものと考えられる。本論文は、この矛盾を彼の自我論と関係付けて摘出し、ベルクソン理解の基本的な枠組みを提示することを目的とするものである。

ベルクソンの自我論にはある二義性が見られる。彼は自我に内的自我 (moi intérieur) と表層的自我 (moi supérieur) の二つの aspects を区別しているのだが、この aspect は「様相」と「局面」という二つの概念に整理されるべきだと考えられるのである。前者は我々の唯一の自我に対する二つの異なるたとえ方を意味する。他方後者は自我が二つの部分に分割され、従って二つの自我であると解釈せざるを得ない場合である。様相と局面というこの二種類の意味の内、我々はどちらをベルクソンに帰することが出るのだろうか。或いはこの二つの錯綜はベルクソンにおいてついに解消されないままに終わっているのだろうか。

そこでまず第一節においては、自我に二つの「様相」を見る第一の解釈に基づいて、我々の自由な行為を創造するものは、内的様相においてとらえられた唯一の自我であると考ええる。これに対して自由ではない行動を、第二節では自我ではないものに帰して説明する。さらに第三節では自我が二つの「局面」を持つという第二の解釈を導入するこ

とによって、自由ではない行動の主体を外的自我に、自由な行為の主体を内的自我に置くこととする。

一 自我の二つの様相と自由行為

ベルクソンの行為論は、行為の自由を否定する決定論との対決を端緒として展開する。この決定論批判は、行為を生み出すに至るまでに変容する、我々の自我に対する理解の相違にその根拠を置いている。すなわち、自我理解に当たって決定論が採る自我の「様相」に誤りを指摘するのである。ここで彼が問題としている様相とは、唯一の我々の自我に対する表象の方法としてであるように思われる。

ベルクソンは決定論批判に際し、決定論に内在する次の三つの段階を定式化している。

- ①物質の作用・反作用は法則によって決定されている。
- ②我々の心理的状态は我々の置かれている物質的状态に決定される。
- ③ある行為を為そうと考える心理的状态は先行する心理的状态によって決定される。

すなわち脳という物質の分子的状态が心理状態に対応し、先行する内的諸状態が我々の行為を決定する。我々が外界

から感覚・感情・観念などの作用を受け、反射運動や所謂自由で意志的な行動という形で反作用していると考えられる。[Cf. Essai107. 108]

この論理に対するベルクソンの批判は、このような図式では自我がそのあり方を変容する過程を説明することが出来ていないという点に向けられている。ベルクソンはまず①を承認した上で、②に対してはその証明の不可能性を指摘している。すなわち生体の状態と意識状態との結び付きは経験的なものに過ぎない。[Cf. Essai111-117]にも関わらず、決定論は自然の秩序と人間の行為、客観的諸現象の継起と意識現象の継起とを混同するという誤りを犯しているのである。[Cf. Essai153-159]さらにベルクソンは、③が前提としている連合説を批判することで、決定論が訴える因果律の原理そのものが内包している矛盾を指摘する。連合説は内的生命の全体を単純感覚という心理的実体の集合と考える。自我を不動の諸事象に還元した上で、それらが継起することで行為を為そうとする心理状態がもたらされると説明するのである。ベルクソンに従えば決定論はこの心的諸事象を奇妙な「ネットワークスの真珠をとめるひも」[PM207]で統合するのであるが、その根拠は不明である。しかしまた反対に、そのような統合を否定する従来の非決

定論者は、諸要素の継起を恣意的な並列に過ぎないと考える。我々の自我が不動の感情が併置されたものに過ぎないとすれば、それが熟考しても、決断し、ある行為を行うに至るまでに変化することは不可能であるというのがベルクソンの反論である。

結局ベルクソンの行為論は、決定論は行為に至る自我を説明することは出来ないという結論に達する。「意識は、来るべき行為の絶対的決定など確認しないし理解しない」[Essai163]のである。

このように決定論・非決定論は、共に行為を創造する自我の変容を説明することが出来ない。ここで我々が注目したいのは、その原因としてベルクソンが指摘しているのが、決定論が我々の自我を外的自我という「様相」において見ている点であるということである。

意識の錯覚は、意識が自我を直接ではなく、様々な形式を通しての一種の屈折によってしか考察するこ

とが出来ないということに由来する。[Essai163]我々が直接に把握するのだと信じている自我そのものの最も明白な諸状態も、多くの場合、外界に由来する若干の形式を通して知覚されている。[Essai167]

決定論が依拠する外的様相によって把握された心理状態

は、我々が自我の外部へ立場を移し、人格について「一連のスケッチ、略図、記号的、図式的な図形をつくること」[PM19]によってのみ得られたものである。このような自我は幻影的、自我、空間内に投影された自我の影、その空間的で、言わば社会的な表象に過ぎないとベルクソンは批判する。[Cf. Essai174] この批判において要点となっているのは、我々の唯一真なる自我を、外的自我という様相では正しくとらえることが出来ないという点であると言えよう。

このような自我の外的様相に対して、行為を創造する本来の自我とはベルクソンによれば、絶対に他の人と置き換えない唯一無比の主體的自我、人格を持つ自我である。自ら生きる能動的なこの自我は、前進する生命の個体における具現であり、創造的で自由な自我であり、また感じたり情熱を燃やしたりする自我、考え込んだり決心したりする自我、その諸状態と変容とが緊密に浸透しあっている一つの力なのである。[Cf. Essai193] このような具体的で生きている自我、現実の自我は、その継起が融合と有機化を含んでいる。ベルクソンが描く行為を産出する自我の変容とは、次のようなものである。

自我は、ある感情を経験したというその事実だけの

ために、別の感情が起こった時、既に幾分変化している。つまり、熟考のあらゆる瞬間に渡って自我は変化し、従ってまた、それを動かしている二つの感情をも変化させる。こうして、相互に浸透し強化する状態の動的な一系列が形成され、自然な進化によって自由行為へと到達することになるのである。[Essai129]

自我はためらいそのものの結果によって変化し、生成発展するのであり、自由行動は熟し過ぎた果実のようにそこから出て来るものなのである。[Essai132] すなわち連合説が描くような継起する不動の要素をネットワークのひもでつなぐのではなく、自我自身が変容して、行為を生み出すに至るのである。

自我のこのような姿を把握するためには、それを内的様相によって見なければならぬ。「表層の下を掘り進むにつれて、自我は再び自己自身となり」[Essai123]、「反省の力強い努力によって、我々につきまといっている影から目を転じて自分自身の内部に立ち戻る時はいつでも、この自我を認めることが出来る」[Essai175] のである。

以上で展開されて来たベルクソンの決定論批判に基づく限り我々は、ベルクソンは我々の自我に由来する行為を決定するものは自我そのものを除いては有り得ない、と考え

ていると理解することが出来よう。我々の自我は他の何者にも決定されずに行為しているのである。

二 身体と行動

さて、前節までの議論で主題となっていたのは、自我に由来する行為であり、決定論はこのような行為を説明することが出来ないということが明らかになった。ここでの我々の問いは、行為が自我に由来していない場合、これほどのように説明することが出来るのか、という点である。前節で批判された決定論は、我々のいかなる行為をも説明することは出来ないであろうか。このような疑問が生じるのは、そのように仮定した場合、我々の全ての行為が自由であらざるを得なくなるからである。ここで自由の問題が、行為の決定の問題と不可分のものとして浮上して来る。ベルクソンは「自我から、自我のみから発する全ての行為を自由と呼ぶ」[Essai130]と定義しているのである。そもそも自由 (liberte) とは libérer (解放する・義務を免除する・障害物を取り除く) されているということであり、libre (自由な・拘束されない) だということである。このことからして、我々が自由であるとは、自分自身では

ないいかなる「もの」や「こと」にも拘束されない状態である。従って我々が行為するに当たって何者にも左右されずに、我々自身の行為について決定する場合、言い換えれば我々が自分自身によってのみ行為する場合、それが「自由に行為する」ということなのだと言えよう。

ここで問題となるのは、行為する「我々」とは「我々の自我」に外ならないのであるか、と言う点である。決定論の誤りは、自我を説明出来ない点にあった。それならば、自我に由来しない行為が有り得るとすれば、そのような行為に対しては決定論は依然として有効な説明原理であると考えられることも出来よう。反対にベルクソンにおいて行為とは全て自我に由来するのであり、「私の行為」とは「私の自我の行為」に等しいと仮定すると、決定論はいかなる行為にも当てはまらない。つまり自由でない行為は有り得ないことになる。しかしながら彼は、「自由な行為は稀なものであり」[Cr. Essai126]、「多くの人が真の自由を知らずに死ぬ」[Essai125]と述べている。このような論述は、自由ではない行為もまた有り得るということを示している。それでは、自我の変容によってはとらえられない行為、自由ではない行為とはいかなるものなのであろうか。

自我の二つの様相が我々の唯一の自我に対する観点であ

るといふこれまでの論述に沿って考えれば、自由ではない行為とは、その唯一の自我に由来しない行為といふことが出来る。そのような行為を支配するものが自我ではないとすれば、それは一体何なのであろうか。ここで我々は自我に因らない行為について考えねばならない。

行為を論じるに際して、有意的行為 (*acte volontaire*) を意味する場合 *acte* を多用していたベルクソンは、より生理学的なレベルにおいて行動を理解するために主として行動 (*action*) の語を用いている。⁽⁶⁾ そして行動が実現される場を、我々の身体と外的な物質の世界に措定する。その上でベルクソンは行動の中心である身体と、行動に向けられた意識について考察し、世界の中に生きる我々と、我々を取り巻く外部世界の我々ならざるものとの相互関係の解明を図るのである。

我々と世界とが関係を持つことの可能性を探るために、ベルクソンはイマジージュという概念を導入する。このイマジージュとはあらゆる物質であると同時に、その物質に対する我々の知覚をも意味する。それを知覚する我々の意識から独立にそれ自体で存在する対象であると同時に、そこに我々が知覚する表象を自身の内に持つものでもある。全ての物質はイマジージュであり、世界はこのイマジージュの総

体である。このような世界の中にあつて、我々は身体を持った存在である。すなわち我々の身体という物体もまたイマジージュである。だからこそ、我々はこの世界を「知覚」することが出来るのである。

私の知覚は……もろもろの物体 (*corps*) の全体の中にあり、次いで徐々に自己を限定して、私の身体 (*corps*) を中心として採用する。知覚がそこに導かれるのは、行動を遂行し、感情を体験するというこの身体を持つ二重の能力の経験による。[MM62]

ここで言われている知覚とは我々が物体に与える表象などではない。むしろイマジージュである知覚がまず総体としてある。それは我々の内に生じるのではなく、物質の世界に、外部に、あるように見えるまさにそこところにあるのである。このようなものとして考えられている知覚は、権利上外的物質そのものに他ならないと言えよう。ベルクソンはこれを「純粹知覚」として設定している。

イマジージュの全体である純粹知覚の内にあつてイマジージュの一つであるこの我々の身体に対して、利害関係のあるイマジージュが反射する。[Cf. MM6] こうして得られた知覚は「我々が通常外的対象や我々自身について持っている光景 (*vision*) が、実在に對する執着や生活と行動との必

要によって狭められ空虚にされた一つの光景」[PM15]である。つまり我々の實際生活が行動を必要とし、行動の必要が視野を制限するに至るのである。この知覚の中心である身体は、「不確定の中心」[MM33]・「現実的行動の中心」[MM28]である特権的なイメージと考えられている。

なぜなら、受けた作用に対して物質が一定の法則に従って反作用するのは異なっており、身体は不確定の反作用を世界に与えるからである。このように身体を、外的諸力に支配される単なる物体としてではなく、刺激に対してある遅延の後に、しかも予見不可能な仕方ではしか反応しない生ける身体としてとらえることによってベルクソンは、自らの身体によって世界に面前している行動主体の姿を描こうとしている。

それではこのような行動を支配しているものは、我々の自我なのであるか。ベルクソンによれば、外界からの作用とそれに対する反作用との間にあって両者を媒介しているのは、脳である。我々の身体は、私の身体を興奮させ、私の意志を喚起する対象イメージから作用を受けて外的印象や運動・影響を集め、運動を伝達・分配・制止する神経・脳を経由して実践的活動を選択し、私が影響を与え得る対象イメージに対して反作用する。ベルクソンはこの

選択を行う脳に自我の所在を認めることはしない。「中央電話局」の比喩で語られるこの脳は、それ自身身体イメージの一部分なのであり、機械的に作用と反作用を媒介するのみであって、「受け取ったものに何も付け加えない」[MM26]。それゆえこのような反作用としての行動をベルクソンは自由とは考えないのである。

三 自我の二つの局面

さて、前節までの議論において我々は、自我の二つの様相を自我の説明原理として解釈し、その解釈に基づいてベルクソンの言う行為の主体を、自由な行為を創造する「我々の唯一の自我」と、自由ではない行動が由来する、物質に反作用する身体という視点から考察して来た。ここで我々は、現実には我々が遂行している行為について再考し、それを自我と身体とのいずれに帰することが出来るのかを問うてみたい。

行為が真に「私の」行為であれば、それは自由な行為である。その「私」(I)を、ベルクソンの自我論のどこに見出すことが出来るのだろうか。行動が身体のみを場として遂行された場合、そこに自我の働きは認められない。ゆ

えにその行動は自由ではないとベルクソンは考える。だがここで次のような反論が想定されよう。行為が真に自由である場合、その行為を帰することが出来るのは自我のみである。ゆえにここからは身体が排除される。しかしながら行為が実現される場となった身体は、やはり「我々の」身体である。自我はこの身体を介せずには行為を実現させることは出来ないはずである。イメージ概念を導入することによってベルクソンは身体と世界との間に道を開いたのだが、しかしこのことによって却って自我と身体、自我と外界との間には断絶を生じさせているのではないだろうか。

このような反論に対してベルクソンは、我々の自我が外界との間に何らかの関係を有することを認めることによつて応えようとする。「我々の自我はその表面で外的世界に触れている」[Essai93]。我々の表層にあって外部の世界と接触している外的自我が、しかもなお我々の自我であるということからこそ、我々と世界との間に関係が生じ得るのである。この表面はまた、社会と我々とは出会う場でもある。ベルクソンは、「我々は表層では誰もが他者と連続している。自我はそれ自身社会化されているのであり、我々の内部に何らかの社会的なものが存在していなければ、社会は

我々に働きかけることが出来なかったであろう。」[Cf. DS7 ~8]と考えている。

我々はここで、ベルクソンが自我の aspect を前節までとは異なった意味において用いていることに注目しなければならぬ。第一節において連合説が依拠していた自我の外的「様相」は、ここでは「第一の自我を蔽う第二の自我」[Essai103]と考えられている。この外的自我とは単に自我を説明するために用いられた様相ではない。それは自我に内在するその外的な「局面」であり、外的自我という自我の一部分なのである。

自我の内にこのような外的な局面を区別することによって、彼は自由ではない行為を位置付けるべき自我の一隅を確保しようとする。それでは外的自我はどのようにして行為を誘発するのであるうか。ベルクソンによれば限りなく変動する我々の感情が不動のイメージに結び付き、外界から受けた印象が意識の表層に凝固している観念を動かして、我々の人格が関与しないままに反射行為に似た運動を引き起こす。ここでは私は意識のある自動人形なのである。[Cf. Essai126 ~127]我々は日常においてはこのような行動している。なぜならばこのような内的生活の方が、「社会生活の要求により良く応じることが出来る」[Essai103]か

らである。このような行動に対しては連合説が当てはまることをベルクソンは認め、我々が自由を放棄してこのような行動に埋没する傾向にあるという点で決定論に同意するのである。

外的自我に対比させてベルクソンが指定する自我の内的局面が、内的自我である。

それは鋭く裁断された結晶体や凝固した表面の下にある、一つの連続的な流れである。それは継起する状態であり、それらの一つ一つが次に来るものを予告し、先立つものを包含している。[Cf. PM183]

それ自身において変容し、真に自由な行為を創造する自我を、第一節においてベルクソンは唯一の自我と考えていたのだが、ここでは自我の根底に内在する内的自我に見ているのである。

自我が二つの局面を持つというこの解釈から我々は、我々の自我が、その内的な局面においては自由な行為を生み、外的な局面においては自由ではない行動の主体となっていると考えることが出来るだろう。それではこのような自我のどこに行為する「私」を位置付けることが出来るのであろうか。

まず外的自我とは「我々の自我」なのであろうか。自由

ならざる行動が由来するこの自我は決定論を許容しており、そこでは真に自由な行為を創造する自我が未だ自己ならざるものによって拘束されている。ここに行為の主体である「私」を置くことは出来まい。

では真の「私」と考えられている内的自我は、現実に行為に至ることが出来るのであろうか。ベルクソンの考察においては、行動は知覚を制限するものである。我々は生活の実利的・物質的側面から注意をそらせることによって、自我の根底において実在の一層完全な知覚を得ることが出来るのである。身体的条件から精神が完全に独立した自我の根底の状態をベルクソンは夢想 (rêve) であると言う。「夢とは常に、身体感覚の運動的平衡によって注意が定められずにいる精神の状態であらう」[MM194]。このような状態にある時、我々は本来の意味で「放心している人 (distrain)」[PM15]なのである。成程自己以外の何者にも制限されずに自己自身であるこのような内的自我は、真に自由である。しかしながらそれは行動の必要からも解放されているからこの自由なのである。我々の真の自我が存在するはずのこの局面は、それ故我々が我々自身である局面、我々が最も自由な局面であるが、しかしまたそこは行為から最も遠い局面でもあるのだ。

それでは内的自我・外的自我・身体・外界の事物のどこに「私」がいるとベルクソンは考えているのだろうか。行動の基盤を全く欠いた空想的・観照的生活など有り得ないし、また逆に、純粹に感覚＝運動的な状態、刺激と反応との間に間隙が全く無いような状態も存在しないだろう。前者は、身体を欠いた精神であり、後者は、物体であるに過ぎない。このような矛盾を解消するためにベルクソンは、我々の実際の在り方に程度を異にする様々の段階を想定する。

我々の精神生活には様々な調子があり、我々の心理的生活は生活への注意の程度によって行動により近く、あるいはより遠く、様々な高さで奏せられる。

[MM7]

我々の日常の行為は、純粹知覚が位置する身体イマーシュと、その対極にある自我の根底との間で為されている。ベルクソンは精神に往還運動 (Le va-et-vient) を認める。通常の自我は極限位置のどちらにも決して身を固定せず、両者の間を動き、順次中間の位置をとる。この意識の往還運動が精神の具体相なのである。

このようにして自我の二つの局面が往還運動によって統合された、その一つの自我が、すなわち「私」であるのだ

ろうか。「一層深いこの自我は表層的な自我と合してただ一つの同じ人格をなしている」[Essai 93] と言いつつ、ベルクソンの答えはなお兩義的である。外的自我に対して我々の人格の関与を否定していながら [cf. Essai 126-127]、しかし他方では「身体に接する物質の平面に知覚が生じ、これらの知覚の中心に私の身体が現れ、行動が準備される。私の人格とはそのような行動を結び付けるべき存在である。」[MM6] とも述べており、人格の帰せられる位置は流動的なままなのである。我々は、ベルクソンにおける自我の二つの aspects を手掛かりとして、真の「私」の具体的な有り様をさらに探求して行かなければならないであろう。

おわりに

本論文において我々は、ベルクソンの自我理解に二つの解釈が有り得ることを示した。自我に関するこの二つの解釈のいずれに立脚するかによって、ベルクソン哲学は異なった姿を提示する。このような枠組みを導入することでベルクソンの思想の様々な問題領域を整理し、理解すること、延いては行為する「私」の姿をより明らかにして行くことが、我々の今後の課題である。

注

ヘルクソンの著作は以下のとおり略記する

Essai: (1889) *Essai sur les données immédiates de la conscience*,

P. U. F., 《Quadrige》, 1993

MM: (1896) *Matière et mémoire*, P. U. F., 《Quadrige》, 1990

DS: (1932) *Les deux sources de la morale et de la religion*, P. U.

F., 《Quadrige》, 1992

PM: (1934) *La pensée et le mouvant*, P. U. F., 《Quadrige》, 1993

傍点は筆者による強調を表す

(一) Sartre, J. P., *L'être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique*, Gallimard, 1943

(二) Merleau-Ponty, M., *La Phénoménologie de la Perception*, Gallimard, 1945

(三) Merleau-Ponty, M., *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, recueillies et rédigées par Jean Deprun, Vrin, 1968

(四) Deleuze, G., *Le Bergsonisme*, P. U. F., 1966

(五) ヘルクソン自身の用語としては表層的自我‘社会的自我 (moi social)’、第二の自我 (second moi) 等が使われているが、我々はいずれを一括して、内的自我の対を為すものとして外的自我 (moi extérieur) の語を用うることにする。

(六) ヘルクソンはおおむね有意的行為として acte を用い、反射的行動を指す場合 action を使用する傾向があるが、振る舞う

(agir)‘運動 (mouvement) 等も含めてその用法には厳密な区別が見られなく。

(小関 彩子・おせき あやこ・京都大学)